

アングル・サーモン

「ジム・マレーという有名なカナダの釣りが札幌に来ています。サケ釣りのベテランで、サケの生態にも詳しい。一度会って話をしてみませんか……」とチユラリスト鍛冶英介氏からの電話。一九七九年二月のことである。私達は前年秋に旗上げたカムバック・サーモン実現の第一歩として、

この年の三月末に札幌の豊平川に百万尾の稚魚を放流すべく、関係諸官庁の間を走りまわっていた。かねがねこの運動は、教育問題としても重要な意味を持つと考えていた私達は、子供達を動員するために、もうひとつ強力なシンボルを必要としていた時である。カナダではサケ問題はどのようになっているのか……。そこが知りたくてマレー氏に会うためにグリーンホテルにとんでいった。

私達からみると大男でハンサムなマレー氏。カナダでも有数の日本通で、剣道五段。カナダ太平洋航空勤務で、自称シムルバー・フォックス（要するに少し年をとりすぎている……の意）。

あいさつもそこそこに、スポーツ・フ

ィッシングから河川環境の保全、さらには北太平洋区におけるサケ漁と資源問題にまで話がおよんだ。鍛冶氏の説明で、彼はPacific Salmon Societyの理事であること、さらにマンガ「釣りキチ三平」に実名で登場していることを知った。札幌でのカムバック・サーモンの運動について解説すると、身をり出してきて、全面的に応援したい……という。後日、

よしまさかず
吉崎昌一



マレー氏とある小学校を訪れた時に、殆どどの小学生が彼の名前を知っていたのは、また驚かされた。こうして願ってもないスターが誕生したのである。カナダからのサケおじさん——アングル・サーモンである。

三月末、シロザケの稚魚百万尾の放流壮行会が、まだ時折り小雪のちらつく豊平河畔で行われた。このセレモニーに、アングル・サーモンは、資料をどつさり抱え、約束通りカナダから飛んできてくれた。「サツポロのサケの運動はすばらしい。カナダにも同様な動きが芽生えつつあります。一度カナダにやってみませんか？」

カナダのサケ・プロジェクト

一九〇〇年代の初頭までは、BC州の諸河川も時期になるとサケが満ちあふれていた。しかし産卵のために河口に集ま

ってくるのを漁業者が一網打尽にする訳だから、資源はどんどん減少する。いかにサケ王国BC州といえども、これではなまらない。それに追い討ちをかけたのが、林業の発達による産卵床河川域の破壊とダムによるサケ上流の遮断である。一九七〇年代末には、おどろくなかれサケの資源量が一九〇〇年頃の約二分の一にも減少してしまうのである。

この状態を心配したカナダ政府の漁業省は、一九七七年になって、BC州のサケ資源量をついて記録に残っている量、つまり現在の倍量にまで復活させるべく行動しはじめた。SALMONID ENHANCEMENT PROGRAM (SEP) の設置で



川をそ上るサケ

(北海道映像記録株式会社提供)

ある。一億五千万ドルの予算で発足したこの組織は、将来、国の税収を高め、雇用の機会を増やして地域の振興をはかり、さらに原住民であるインディアンの生活に寄与し、環境の保全をも目指すものである。私達がとくにこの組織に関心をも

つたのは、日本の単なる「補助金行政」とちがひ、教育面の重視と地域ボランティアの活動が大きな軸としてとりあげられていたからであった。

百聞は一見にしかず——一九七九年九月、私は札幌市民代表としてえらばれた児童文学研究者西田良子さんと、バンクーバーに飛んだ——。

SEPのスタッフのガイドできめのこまかい教育活動の実態を見学して歩き、各地のふ化場の調査、専業漁業とスポーツ・フィッシングの関連など、私達の知識は急増したといつてよい。バンクーバーからあまり遠くないシニエルト小学校を訪問した時、西田さんは、子供たちのゲームにもサケ教育をとりいれているのを見て感激していた。これまでスーパーマーケットのサケにしか関係がなかった西田さんが、サケの実態を知るにつけ、熱烈なカムバック・サーモンの支援者に変ったのである。サケのもつみごとな生命連鎖、そして環境とのかかわりあい、回遊のロマンなどが、現在の子供達の教育に欠けがちな生命の尊厳というテーマに、ぴったりだというのである。

SEP側も、はじめは若干とまどつていたらしい。北海道といえば、サケふ化事業の先進地(?)である。そこからサケの専門家でもない日本人が、サケ問題の調査にとびこんできたのだから、無理もない話である。例えば、こんな質問をS

(十六ページに続く)